慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 : 吉原直樹・近森高明編『都市のリアル』有斐閣、2013年
Sub Title	
Author	澤, 宗則(Sawa, Munenori)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2015
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.20 (2015. 7) ,p.188- 193
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル : 「書評 : 吉原直樹・近森高明編『都市のリアル』」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20150704-0188

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：吉原直樹・近森高明編

『都市のリアル』有斐閣、2013 年

澤　宗則

編集委員の近森先生から本書の書評の依頼をいただいた時､「テキストとして編まれた本書はテキストとして書評する」のが最もふさわしいのではないかと考えた。そこで、勤務する神戸大学での演習（コミュニティ論演習 A・B）のテキストとして、学部 3〜4 年生と院生の合計 14 人で輪読を行った。担当者が毎回各章の内容を紹介したうえで、論点を 2 つ提示した。ゼミ参加者は 2〜3 班に分かれ、論点に従い議論を行った。1 つめの論点に関し、KJ 法に則りながら、付箋紙（1 項目 1 枚）と模造紙を使用し議論し、班内での意見をまとめ、発表を行った。質疑応答の後、他の班の発表と質疑応答をそれぞれ行った。その後、2 番目の論点について同じ作業を行った。なお、発表レジュメ、各班での議論内容については、澤ゼミ＠ブログ（http://sawazemi.blog68.fc2.com/）で公開し、そのコメント欄を利用して、執筆者や他の読者との交流を企図した。都市を読み解くこのテキストを、学生がどのように読み解いたかを示したい。

＜序章「ゆらぐ都市」から「つなぐ都市」へ＞「つなぐ都市」において重視すべき要素は何かが論点となった。「格差」の問題が様々な場所、形で露呈されていることがうかがえる議論だった。興味深かったことは、どの世代に焦点を当てて問題解決に取り組み、その恩恵を受けるかが班で異なった点である。A 班では「格差の再生産」や「未来のビジョン」を見つめる必要性があるとし、次の世代に焦点を当てていた。これとは異なり B 班では、「格差」の問題解決に取り組んだ結果が見える形で現れる（または自分たちに還元される）ことが、個々人が問題解決に取り組むうえで重要であると結論付けた。将来の問題を解決するために「今」すべきことを考えることはもちろんのことだが､現代において将来の世代まで見据える余裕がないほど、現代社会の問題が逼迫していることが感じられた。

＜第１部　問いのなかの都市　第１章　計画と開発のすきまから―人間不在の足跡を読む＞戦後の都市計画と都市発展における「人間不在」の考えから、その後コミュニティ政策、地縁を再形成しなければならないという議論が発生した。都市から郊外への人口流出が起こり、地方・郊外・都市に限らず、集落・コミュニティの維持が人口減少により難しくなるという事態に直面している。東日本大震災を契機として、コミュニティの再編に注目、同時に新しい地域マネジメントに向けての議論も発生している。どの班の議論においても、同世代間、また、他世代間での繋がりを生む場、機会、装置作りが根本として求められるのではないかという文脈を感じとることができた。

澤宗則「吉原直樹・近森高明編『都市のリアル』」
『三田社会学』第 20 号（2015 年 7 月）188-193 頁

＜第２章　都市は甦るか―不安感の漂うなかで＞日本が選択すべき都市像とは何かが論点となった。テロ事件、自然災害などのような予知不能なリスクは、都市が直面している危機をさらに深刻化させている。危機への対応の視点から、現代都市のあるべきビジョンをどのように考えればいいのか。それは経済の繁栄のみならず、住民一人ひとりの「生活の質」を確保することに重点をおく、「持続可能」な都市づくりを目標とするはずである。ニューヨークと東日本大震災被災地を手掛かりとして、各班は日本が選択すべき都市像について、危機管理と住みやすい都市の提言や、コンパクト化都市への異議などをベースに構想した。同時に、リスクに直面する現代都市の脆さも十分に認識し、安心・安全な都市ビジョンを目指す時の、監視社会の強化によるコミュニティの崩壊などの諸困難が挙げられた。

＜第３章　不安の深層から―見えない犯罪の裏側を探る＞日常生活のあらゆる場面において安心・安全な社会づくりへの取り組みが行われている。担い手も個人や組織と様々だ。また自主防犯・カメラでの監視・データベース化と時代が進むにつれて効率化も進んでいる。しかし、効率化によって排除や、表向きは防犯のためであっても結果として不安が増大する矛盾がより顕著になってきた。そうした二面性を持つ安心・安全への街づくりは、多様性を失い、同質性を高めた、「閉じた社会」をつくりあげてしまう。結果として少し怪しいと感じたらすぐに排除の力が働く社会になってしまうのだ。そうした社会にならないためにはどうしたら良いのか。挨拶程度が出来る近隣との付き合いや、NPO を活かした街づくりが必要なのではないかという意見が出た。だが現実的には、人々の倫理観や価値観は人それぞれであるため、そうした社会の実現も難しいのかも知れない。

＜第４章　働くものの目線―サービス産業化する都市の内側＞第三次産業の労働環境の問題は都市であることと不可分に関わっている。それは人口の集中であり、非フルタイム労働者としての若者、女性が求める就労先としての存在でもあり、そして第三次産業に従事する者を対象とした市場でもある。言いかえれば一次・二次産業を主とする地方と、第三次産業を主とする都市では、飲食店やコンビニエンスストアのあり方が異なってくる。労働環境の問題については、現場を回すには圧倒的に不足している人員と、対して可能な限り人件費を削減したい経営側との相互の不一致、また労働者の定着がすすまないという負のスパイラル、人的資源をすり減らして利益を生み出しているといった都市の中の矛盾の一つの顕在化とも取れるだろう。法律の順守は前提として、過剰サービス気味にある現状から抑制方向に入る、労働者が抵抗力を持つなど、意識改革、啓蒙的な部分での改善が必要という意見があげられた一方、労働組合による問題解決という意見は少なかった。

＜第２部　ゆらぐ都市のかたち　第５章　見えない家族，見える家族―イメージの変容から＞女性の社会進出による性別役割分担の変化、「家」から「個」への価値観の転換、さらに経済状況の変化による一億総中流モデルの崩壊、出産・育児を困難にさせる社会システム、こうした背景が複雑に絡み合って家族のあり方を変化させている。また、地域コミュニティの希薄化も、同じく進む現象である。こうした中で高齢化や無縁化が大きな社会問題として取り上げら

れ、一方でそれをきめ細やかに包摂できるだけの公的システムが機能不全に陥っている。家族内、家族間、家族が属する社会、この 3 つが相互的に関わって問題を複雑化させている現状をどう捉えたらよいか。議論では家族の解体にまで話が及んだ。これまで家族が担ってきた機能は民間の外部サービスによって代行される。しかしその受益者とならない弱い立場の人々は、「自助」のもとに家族内外の自主的扶助を求められる。国家がそうした人々を包摂できるだけの体力を有していないことも事実である。現状を正確に捉え解決につなげていくためには、まず家族の多様化を理解することと、その背景にある社会環境の変化に目を配ることが不可欠だろう。

＜第６章　あるけど，ないコミュニティ―町内会のゆくえ＞既存のコミュニティとそれを補完する部分的コミュニティは、それぞれ限界性を持っている。両者を包括するものとして、行政などがそれぞれのコミュニティの構成員を繋ぎ、新たなコミュニティを創りだす場を提供していくことが求められる。いわゆる「ブリッジとしてのガバナンス」であり、その主体はあくまで構成員であって行政ではない。しかし、こうした新たなコミュニティが個人化の進む現代社会において実現可能かどうかについて、有効な答えを出すことができない。参加のインセンティブを生み出すことは容易ではなく、持続性にも問題がある。限界性を克服するための新しいコミュニティそのものが、プランニングの段階で既に限界性を持つという袋小路に陥っているのである。

＜第７章　きしむワーク―行政のはざまで＞その日が暮らせる生活の糧しか得られない人、単純化される仕事に長時間拘束される人、正規の仕事はなく雑業に追われている人など、しんどさを抱える人々が都市にはあふれている。まじめにこつこつ努力することが成功への近道だった時代は、過去のものとなったのだろう。一人ひとりのまじめな努力では解決できない労働に関する「しんどさ」「きしみ」が、どこからくるのか。学生の多くの議論が現実からかけ離れた上滑りになってしまうのは、高齢者や貧困層など社会的弱者の生活実態を理解できていないからであろう。さらに、「社会構造を変革するために」必要なことは何かを論議したが、社会の変革がどこから起こるのか、それは誰が取り組む問題なのか、私たち自身の取り組みなのか、経験がないために問題を掘り下げられないもどかしさを感じた。同じ人間として、わが身をきしむ現実の場に置いてみて、その現実に対して何が必要か、学生一人ひとりに何ができるかを議論できる力が必要だと感じた。

＜第８章　生と死のあいだ―都市高齢者の孤独に向き合う医療と介護＞自らの生と死について考える議論となった。学生にとっては、「死」を身近のものとして捉えるのは難しい。しかし、少子高齢化が進み、無縁社会とも言われる都市に住まい都市に死ぬ 1 人の人間として、生と死を分断することなく一本の繋がりとして捉えた時、望ましい「死」を迎えるためには「生」のあいだの様々な要素（就職・結婚・人とのつながり等）が必要になることが見えてきた。例えば、間近に控えた就職も、長い目で見れば 1 人ひとりの「死」につながる重要な選択の時だということ。とりわけ女性にとっては結婚が、居住地選択という点でその後の人生に大きく関わ

るということ。「死に方」につながる数々の問題がすでに学生の目の前に存在していることに改めて気付いた。ここに、“「どう死にたいか」を決定するためには、「どう生きたいか」を問わなければならない”（p.152）という文章が、より説得力を持つものとして学生の心に残ることとなった。

＜第３部　つなぐ都市へ　第９章　新しい絆のゆくえ―ソーシャル・キャピタルのいまを解く＞ソーシャルキャピタル（以下 SC）は普段は意識されにくく、震災などの際に初めて意識され、機能するものだという印象を受けた。現代社会は人とのつながりが薄れ、個人化・人間関係の希薄化が進行している。その結果、阪神・淡路大震災では 200 人以上の人が孤独死で亡くなってしまった。一方、東日本大震災では地縁による SC が強すぎるために、被災状況の差によって人間関係が複雑化してしまっているという現状もある。SC は人とのつながりや信頼から成る生身で非常に難しいものである。だからこそ、そのようなつながり（悪く言えばしがらみ）から逃れたいがために、人間関係の希薄化が進行していると考えられる。面倒な人間関係を取っ払ってしまった時に残るのは、孤独死に至る「孤独な生」なのだろう。人とつながる以上、面倒なしがらみも一緒に抱えてしまうのは仕方のないことなのではないだろうか。そのような側面を意識しつつ、孤独な生を防ぎ、有事の際にも SC が機能しうるコミュニティを創っていくための生き方を日頃から意識しなければならないと感じた。

＜第 10 章　文化を編みなおす―夢物語から立ち上がる＞文化遺産の意識に関しては、自分が学んだり体験したりすることによって、意識の程度が変わる。意識が高まれば後世に伝えたい、残したいという気持ちが生まれる。しかし、周りの人間や、企業、自治体などに需要やメリットがなければ、文化遺産の保存を実際に行うのは難しくなる。多くの者にメリットがある文化遺産が保存され、そうでないものは自然に淘汰される。残されるもの、なくなるものはその時代の時代背景や権威者の影響によって大きく変化すると考えられる。なお、ゼミでは、近江商人ゆかりの地である近江八幡のフィールドワークを行い、本章の論点に従って振り返りを行った。

＜第 11 章　サウンドスケープ今昔―あふれる音の向こうに＞各自の心に残っている歌を時期別に並び替え、さらに音楽の三層構造である「コモン」「スタンダード」「パーソナル」に割り振った。すると、大学生が耳にしている歌（2000 年代）は主にテレビの主題歌や CM 挿入歌、学校での合唱曲が多く、三層構造のいずれでも、他の年代の曲に比べて認知度は高かった。しかし、時代が遡るにつれて、大学生世代の認知度は名曲と呼ばれる「スタンダード」のみに偏り、「コモン」や「パーソナル」の曲は、親など上の世代の影響や映画・小説・ラジオなどで各々が認知してその曲を聴くようになるというプロセスを踏んでいるので、認知度は低下する傾向を見せた。定年退職後入学したゼミ生がいるので、70 年代前後に青春時代を過ごした者の音楽観も見ることができた。受験勉強や子供の出産時の喜び、家族愛など若い時代の体験や経験と曲が一緒になって記憶され、歌と共に当時が想起されている。また、古い時代に分類された曲ほど「スタンダード」に分類されていないものであっても、いまなお多くの人に認知され

ているものが多く、メディアがテレビ・ラジオ中心で、現在よりも「音楽」という分野が細分化されていなかったこともわかった。

＜第４部　都市のリアル　終章１　上からと下から―都市を見る漱石の目、鷗外の目＞

学生たちの都市空間のとらえ方を具体的に出してみた。まず「上からの視点」では、住宅街、商業地域など土地利用によるとらえ方、地図、衛星写真、山の頂上という鳥瞰的なとらえ方が多く出た。その他、未知の土地をネットのマップで調べる、統計で町の特徴をとらえる等の視点が出た。これらは、都市を外から見る把握方法であり、視覚優位で静止的な都市のとらえ方である。これらに共通しているのは、ランドマークとなる建物、道路や土地利用を、どこであっても同じ目線で、「何の違和感も抱かずに入り込み、しかも徹頭徹尾『上から』『外から』他者として見下ろすという態度」（pp.215-216）で見ている点である。しかし、学生の経験する「上からの視点」の中に、鷗外と同じような「上昇志向」を経験したかどうかに関しては、神戸大学に合格して、誇らしい気持ちでキャンパスへの坂道を歩いた時や、キャンパスから神戸の街を見下ろした時のことを思い出してもよかったと思う。そうすれば、鷗外が感じた都市に対する「自負心」や「他者として利用する」気持ちなどが理解できたかもしれない。次に「下からの視点」では、「人」と「環境」とに分けられると考えた。「人」では、都市に暮らす人（若者、高齢者の割合）、観光客や人の多さ、人の交流、着ているもの、幼少時代の経験などがあげられた。視覚・触覚などの感覚で都市をとらえるという視点は難しい。「環境」では、町の臭い・雰囲気、動植物の存在、街の照明（明るさ）、商店の種類、話し声、神聖な場所の存在、鉄道・道路などの生活空間などあげられた。漱石が感じた「街が発する激しい動きや音に対する内面的恐怖」を感じる場合を検討すると、「環境」については、「快／不快」で考えてみる視点があるという意見が出た。そして、不快と感じる環境の中で、内面的恐怖を感じる人がいるのではないかと考えた。例えば、街の照明や臭い、鉄道・道路などの生活空間などである。これらはまた、人によって異なる感覚である。しかし、あくまで「都市に住まう者」が感じる視点であることに違いないものをあげられたと思う。

＜終章２《都市的なるもの》の救出―ベンヤミンを補助線にルフェーヴルを読む＞都市で自由を感じられる地域やタイミング、また反対に自由を阻害される例を挙げた。地域としては下町が、タイミングとしてはハロウィンの仮装や関西の野球球団が優勝した時など、お祭りのような極めて限定したものが挙がった。自由を阻害するものとしては、公共の空間であるはずの公園で特定の遊びを禁止されたり、自由な学びが保障されているはずの学校で不自由さを感じたりといったものが挙げられた。中でも、自由を保障するための法律によって、逆に私たちの生活が縛られていること、お金により大抵のものを手にできる自由があるが、逆にお金がなければ不自由になっていくこと、この二面性・両義性に注目していかなければならないと考えられる。富を持つ者が政治権力と結びつき、自分たちに都合の良い政治を進めていくことで、富を持つ者の自由が増していく一方で、貧しい人たちの自由は奪われている。中間層は富める者の恩恵にあずかって自由を感じるときもあるだろうが、反対に富める者にしか有利でない政策

が進めば不自由を感じることもあるだろう。富める者への規制を強化すれば中間層以下は自由を感じやすくなるのか、というと必ずしもそういうことにはならないだろう。どんなに社会の諸制度が整ったとしても、人々が他人と関わり合い社会の中で生きていく時には、自由を感じる場面もあれば不自由を感じる場面も出てくるのではないだろうか。

あの「お堅い」有斐閣出版の書籍とは思えないポップな表紙カバー。都市の駅前のような「都市のリアル」な風景から、表紙をめくり、現代の都市社会論へと読者を誘う。その風景の深層にある都市の様々な問題点、歪み、矛盾を知り、共有し、解決案に苦しみ、さらにその一つ一つが実は学生のリアルな日常に繋がっていることを実感した１年であった。以上、「学生のリアル」な声をまとめた書評である。なお、参加した学生は以下の通りである。上田隆太郎、伊藤優季、張超越（以上人間発達環境学研究科・院生）、小田敏文、石上大樹、木嶋恭子、沼田智紀、細田隆史、岡川鉄平、刃刀美優、田中謙太郎、田淵公蔵、横江祐介、吉岡優（以上発達科学部・学生）。

（さわ　むねのり　神戸大学人間発達環境学研究科）